

大城立裕 「朝、上海に立ちつくす」におけるアイデ ンティティ

黄, 英
中国海洋大学 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/1518294>

出版情報 : Comparatio. 18, pp.62-74, 2014-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン :
権利関係 :

大城立裕「朝、上海に立ちつくす」における

アイデンティティ

黄英

はじめに

一九六七年度上半期の芥川賞を受賞した大城立裕は、沖繩出身としては初めての受賞作家となり、沖繩近現代文学を代表する作家である。大城の文学世界は自分が沖繩出身のためか、沖繩色が濃厚である。里原昭の言葉を借りれば、「作品の素材を琉球王朝から現代史まで、時間的、空間的広がりをもって創造されている。が、この数々の作品世界の内部に組み込まれている氏の文学精神は、オキナワ人の文化的アイデンティティ（主体性）の回復、ひいては、人間としてのアイデンティティの確立という問題を、ヤマト・沖繩相互の自立的な結びつきに求めている」と、大城文学はいかなる題材にもかかわらず、沖繩人のアイデンティティ追求を重要なテーマとし、沖繩表象へのこだわりが一貫していることを評価している。

「朝、上海に立ちつくす」^二は、大城が一九七三年に書き下ろし、一八三年に講談社から出版されたものである。彼の青春時代の中国体験が題材になっている。大城は一九四三年、十七歳のとき、中国上海に設立されている東亜同文書院に入学した。時期はちょうど日中戦争の末期にあたる。彼は上海という異国の地で、日本の敗戦を迎え、そして、中国語翻訳者として、戦後事務処理の仕事にも徴用された。この小説は大城

が自分の中国体験（東亜同文書院時代）を主題にして書いた唯一の作品である。

この作品について、岡本恵徳は、教養小説的な「青春小説」として一定の完成度を示したが、かつて完全に日本人意識にとらわれていた過去を客観的に確認し、作者の現在の自己確認（沖繩へのこだわり）が見られないと批判した^三。また、武山乗梅もこういう点（沖繩へのこだわりのなさ）に注目し、「沖繩」と切り離された作家・大城立裕を見出すことができる^四と、大城のもう一つの可能性を指摘した^四。

はたして、「朝、上海に立ちつくす」という、沖繩を遠く離れた上海という地での体験をテーマにした作品において、沖繩へのこだわりがほんとうにないのか、沖繩と切り離れた大城文学の可能性はあるのか、沖繩表象をテーマにしてきた大城文学のなかに、この作品はいかに位置づけられるのか、というような視点で考察したい。

また、主人公知名は中国人にとっては侵略者としての日本人であるとともに、日本の植民地出身の沖繩人でもある。こうした彼がかつて琉球王朝と長く特殊な歴史関係をもつ中国という場において、自分のアイデンティティを考えないわけにはいかないのではないだろうか。

本論は沖繩へのこだわりという問題を出発点として、テキスト分析をとおして、主人公知名の日本人・沖繩人／加害者・被害者という多重な立場を明らかにし、大城が今まで追求してきたアイデンティティ問題が、本作において、どういう形で表現されたのかを究明したものである。

一 避けたい（沖繩）

作品において、主人公知名が沖繩出身であることをはじめて示すのは、軍米収買に行った際、逢った若い中国人の嫁を見て、故郷沖繩にいる恋人幸子を思い出すあたりである。ただし、「中国の片田舎の農家の娘を見て幸子を思い出したなど」と書いたら、きつと誤解されるだろうか。日本では『蘇州夜曲』だとか『上海の花売り娘』だとかというイメージでしか中国を見ていないからだ」（十七頁）と書かれているように、故郷沖繩のことに触れてはいるが、自分を中国と対立側にある日本人としか思っていない。

「あなたも行くのですか」「もちろん。日本人だから（傍線部は引用者。以下同じ）」「日本人はみな兵隊に行くのですね」「朝鮮人でも台湾人でも行くのです」だから日本の内地人なら尚更のこと、と強調する気持ちがあった。しかし言ってしまったあとで、何のために強調したのだろうか、と省みた。（一一四頁）

中国人范淑英と戦場に行くかどうかの会話のなかでも、明白に日本人という意識を表している。それに、自分は日本の植民地朝鮮や台湾の人と違って、日本の内地の人間であることを強調している。知名には、自分の故郷沖繩が日本の植民地であることの意識はない。

さらに、以下の場面では、沖繩を避けたい気持ちをはっきりと表れている。

「知名さんは、沖繩出身だから、そんなに支那語がうまいのですか。」この種の質問は、この一年間に馴れっこになっているから、慌てずに「ごまかして、「俺などより、はるかに織田のほうがうまい」。（五〇頁）

「知名さんは何が大好き？」萩島夫人が料理の事を尋ねるが、知名は湯面、排骨面の類にしか馴染んでいない。「学生時代に選り好みがあるはずないのだよ」萩島が助け船のつもりで言うと、「そうね。沖繩の料理って、支那料理に近いんでしょからね。」それをちがいますというのも億劫になって、何でも頂きますといったのだが、それで答えになったかどうか。（八五頁）

日本人から、知名が沖繩出身であることを指摘されるときは、しばしば中国との関連で指摘される。これは、知名にとっては、不都合で、なんとなく避けたい話題である。日中戦争の最中に、占領される側の中国との近縁関係を指摘されることを避けたい気持ちが働くだろう。

しかし、そこには中国と一線を画したいという気持ちより、日本の枠に収まりたい、いわば、日本人になりたいという願望が強く働いていると考えられよう。では、どうして、そんなに日本人になりたいのか。小説中の朝鮮出身の金井に言わせれば、「日本人になりたいというのは平等を望んでいるだけ……」（八七頁）。そこには植民地における差別問題が提出された。この作品では沖繩をめぐる差別問題ははっきりした形で表されていないが、以下の下りから、それを想起させざるを得な

い。

言葉が正確には聞き取れない。しかし、そうであるに違いない。それがいつのまにか非難の声に変わって背後から浴びせられているように、知名は感じた。言葉が分らないということが、ひとつの罪であるように感じた。（中略）贖の兵隊、贖の通訳であることを、その聞き取れない言葉で言われているような、後ろめたさが知名を襲った。（十二―十三頁）

知名は学生でありながら、軍部の命令で、兵隊に偽装され、軍米収買に同行させられた。現地の方言に慣れず、言われる言葉がほとんど聞き取れない。言葉が聞き取れないことに対して、「一つの罪であるように感じ」る。小説の中では、知名のこうした思いについて、「学校で教わっている北京語とはまるで別のものだし、上海の方言からもまだ遠かった」（十三頁）と、聞き取れない理由を説明している。しかし、正式の通訳がついているから、知名には現地の言葉を聞き取る必要がない。占領側の人間として、被占領側の人間の言葉が聞き取れなくても、恐れる必要もなさそうである。にもかかわらず、言葉が分らないだけで、知名の心の中では、一つの罪と感じてしまう。こうした言語に関する罪悪感 はここでは過剰な表現として、唐突に感じさせられる。では、どうして、罪という表現を取ったのか、この罪悪感はどこから由来したのだろうか。やはり知名の沖縄出身によるものとして考えざるを得ない。

かつて、明治政府は日本国全土において言語風習統一運動を推進した。琉球処分によって、完全に日本統治下に置かれた沖縄県においても、植民地統治政策の一環として、日本標準語普及運動が進められた。一九〇七年以来、沖縄中学校を中心に〈方言札〉という賞罰制度が導入され、学校で琉球方言を使う学生の首に、〈方言札〉を掛けることになったのである⁵⁾。つまり、日本語が分らなければ、あるいは、話せなければ、罪を犯すことになり、厳しい罰と侮辱を受けることになっていった。このような言語植民地統治の歴史は沖縄人の心の底に、深い傷を残した。無意識のうちに、言葉が分らないだけで罪と感じてしまう知名の過剰反応は、沖縄における過去の精神的苦痛に根付いたものと考えられるだろう。

沖縄には過去にこのように差別された経験があるからこそ、知名のような沖縄出身の人間は、〈沖縄〉を避けたいのであろう。それに、このような植民地出身者への差別意識は、ただ歴史的なものではなく、学生暴発事件を調査する際、憲兵隊が朝鮮出身の金井を特別視する行為からも、その差別意識の存在は否定できないのである。沖縄を避ける知名の行為には、かつて差別された経験、あるいは今現在も続いている差別意識の現実から逃れる意図が潜んでいると言えよう。

二 身分の多重性

知名は沖縄出身であることを隠したいものの、日本人から見れば、彼は沖縄の人間である。書院内においては、書院生同士に差別はないのだと主張しているが、軍部、憲兵の威圧的な態度に遭遇すると、こうした

無差別説は屢気楼のように容易に崩れてしまうものである。前述の引用文からわかるように、萩島夫人も他の書院生も、故意にはないが、出身話に触れると、知名は不安を感じ、ごまかすほかはなかった。

しかし、日本の植民地である朝鮮出身の書院生金井との付き合いによって、沖繩出身である知名は自分の出自に直面し始め、改めて沖繩について考えるようになった。

まず、金井との会話を見てみよう。

「自分は朝鮮人だと主張している。たしかにそれもある。しかし、一面でひどく日本人になリたがっている」「そうだろうか」むしろ大きな皮肉のこめられた言葉ではなかったか。それゆえに自分は感動した、と知名は思い出す。「知名はなぜ書院を選んだ」「別に。

県費で学校を出られるから、というにすぎなかった……」（中略）

「だから、今でも目標などありはしない」「僕も朝鮮総督府の派遣生だが、支那へ来てみれば、民族というものについて自分の考えがもう少し固まりはしないか思ってきた」「それだけでも立派なものだと思ふよ」（中略）これは本当にお世辞ではないのだと、知名は思った。そして、この思いがなんとなく嬉しかった。（八六頁）

上海にある同文書院に入学した金井の目標は、民族というもの、すなわち自分の出身地朝鮮と日本の関係について考えようということにあるのに対して、知名は金井の「なぜ書院を選んだ」という問いに、「別に。

県費で学校を出られるから、というにすぎなかった……」、「だから、今でも目標などありはしない」と答え、今まで出身地沖繩問題に関して、深く考えたことがないことを表している。しかし、金井が自分は植民地出身であると主張しながらも日本人になりたがるという内的葛藤の表明に、知名は感動する。これは、金井の矛盾した思いが自分の心境と重なる部分があり、理解者が現れたことへの感動と読み取れるだろう。ゆえに、知名は普段金井のように民族について形而上的に深刻に考えたことはないが、日常生活の面で、常に植民地出身という問題に囚われ、植民統治の被害者として、苦勞していることはいかがえよう。

植民地出身者は、ただ民族平等問題のみならず、東亜同文書院の日本人学生として中国という地に来て、戦争参加問題にも関わっている。金井は「兵隊に行くことは殺し合いに参加することだ」（八七頁）と、戦争の残酷さを充分に察している。さらに、「そうすると、朝鮮人と日本人とが殺しあうイメージは浮かんでも、この二つが一緒になって支那人を殺すということは考えられない」（八七頁）と植民地出身者が中国侵略戦争に加担することのおかしさも予想している。

金井のこころの深い淵をのぞきこんだ思いで、知名は黙った。そうして、自分の場合はどうだろうと考えた。兵役も徴兵延期撤廃も、当然のこととして単純に受け止めている。徴兵忌避などということはない、明治時代の沖繩にあったということを昔話のように聞いてはい

るが、今では思いもよらないことだ。(中略) すくなくとも知名はそんな難しいことは考えない。

しかし知名は、いま金井を理解しようと努めている自分に気が付いた。とてもよく分るような気がすることに驚いた。これは沖繩出身だからそうであるのか、日本人一般にそうであり得るのか、よくは分らないが、なにかひどく連帯感のようなものを感じている自分を発見した。(八七—八八頁)

知名は金井の植民地出身の被害者意識には同感し、感動したが、植民地出身者が中国侵略戦争に参加し、加害者になるということは、「難しいこと」として、それまで考えたことがなく、当然のことのように、兵役を受けていた。知名は金井の問題提出に対しては、沈黙した。そして、「自分の場合はどうだろう」と考えはじめ、金井との緊密な連帯感に気付いた。その連帯感は沖繩出身によるものかどうかは、確実な形では表現されていないが、出身地沖繩について単なる避ける対象ではなく、そこに纏わるシリアスな問題も意識し始めたことは確かであろう。

一方、中国人の目には、知名はどういうふうに見えるだろう。

知名の脳裏をこのとき過ぎたのは、軍米収買のときに見た農民たちの顔であった。彼らが知名たちを見る眼つきが、たえず気になっていた。(中略) ふと電車の車掌の顔が割り込んできた。それから工部局警察署の若い取り調べ官の顔であった。一方は怒り、一方は

冷やかであった。どちらも知名を容赦しない顔であった。「措油」という上海語を使ってみたくて、と言っても理解してくれなさそうな顔であった。(二〇八—二〇九頁)

知名の頭に思い浮かぶのは中国における三つの体験である。一つは軍米収買に参加したことである。収買といっても、実は中国農民から武力で米を奪うことである。その時奪われた農民たちの顔に浮かんだ恐怖、憤怒といった表情は知名には想像できただろう。もう一つは電車で中国人車掌と口論した経験である。知名は会話練習という口実で中国人車掌に向かつて、平然と侮辱的な言葉を使うと、車掌に罵倒された。その車掌の顔は知名の目に憤怒の塊に見えた。最後は車掌との口論のことで、知名は租界の警察署で、中国人取り調べ官による調査を受けた。知名は語学学習のため上海語「措油」を使ったままで侮辱の意味はなかったと強調したが、「措油」という言葉にはマイナス傾向の意味があったことを知っていたながらも、語学学習のために、対象を選ばず車掌に使ったこと自体が、もはや相手を侮辱することになっている。若い中国人取り調べ官の冷やかかな表情は、知名の植民者、侵略者としての日本人の身分に甘えていながら、悪意がないと強調することの滑稽さに発したものだだろう。農民、車掌、取り調べ官、このような一般中国人から見れば、知名は単なる侵略者、植民者としての日本人でしかない。

知名のこうした甘い身分認識は東亜同文書院の表向き教育方針によるものである。いわゆる日中連携、欧米駆逐などの教育方針は、知名の

ような若い書院生のみならず、書院の教授らにも自らの侵略者、植民者という身分を曖昧化させた。

この上海という土地で、日本人の学生だけで寮生活をしていて、日本風の食事をとり、日本式の礼儀作法を守っているほうが、むしろ不自然かもしれない、と思えてきた。范淑英の淡いグリーンの中国服に包まれた姿が、やはり異国の人に思えてきた。が、次の瞬間には、彼女たちの生活のなかに割り込んでいる自分たちのほうが異国の人の人なのだ、と思いなおした。(一五〇—一五一頁)

終始日中親善を掲げた東亜同文書院の学生として、中国人に侵略者視されるのは、知名にとって受け容れがたいことであるが、現実はそのようである。作品の冒頭にあるように、知名が兵隊に偽装して、軍米収買に参加させられた時から、そういう現実に向面している。最後に、上海に同文書院があること自体が不自然であり、自分が外来者、つまり侵入者、植民者であることに気付いた。

知名を日本人視する一般中国人と違って、范淑英一家は知名に友好の意を示している。それはやはり知名が沖繩出身であることと関係している。

知名の入営が決まり、范淑英一家は知名のために送別会を行った。沖繩というよりは琉球といったほうが誰にも分りがよく、琉球からも同文

書院に来ているのかと范徳全が感心して見せたのは、ちよつと分りにくいが知名には思い当たる節があった。知名は予科で使った地理の教科書を思いだした。中国で作られた教科書であるが、そのなかに、「中国の失われた領土」という項目があり、「琉球」も掲げられていたからだ。范徳全は琉球人である知名をなけば同胞だと思いたがる節があり、(後略) (二二八頁)

范淑英の父范徳全が知名に親密感をもつ理由についての解釈であるが、ここではじめて、琉球という言葉が現れた。琉球という言葉に潜む歴史的な意味合いも自ずと浮上してくる。かつての琉球王国、中国との朝貢関係、薩摩に占領された琉球藩、そして、日本明治政府による琉球処分後の沖繩県、という沖繩が歩んできた苦渋の歴史を想起させる。作品のなかで、知名が沖繩の歴史について意識するかどうかは、はっきり書かれていないが、ここで、琉球という言葉が出てくる以上、かつて日本とは別国家であった琉球王国の意味合いが浮上してくる。ここから作家大城の沖繩へのこだわりを垣間見ることができらる。

以上のように、日本人であると同時に沖繩人でもある知名は、多重の身分を持ち合わせている。日本の植民地沖繩出身者から見れば、彼は被害者ではあるが、日本人として植民地の中国上海に来ている以上、侵略者、植民者になり、加害者でもある。知名をめぐる人物はほとんど特殊な身分の持ち主である。朝鮮出身の金井、台湾出身の梁、中国人范淑英。みな植民地出身である。こうした人物関係図の設定は明らかに知名の身

分の複雑さを引き立てる役割を果たしている。知名の日本人としての立場が顕在化したものであるとするなら、沖縄人としての立場は潜在的なそれになるだろう。

三 複雑な立場で体験した苦渋の思い

この作品は副題が示しているように、同文書院が大城にとってなんでもあったかという問いを出発点として、痛々しい青春時代を描いたものであるが、主人公知名の苦渋の思いは、ただ同文書院生としてではなく、多重な身分という複雑な立場で、体験されたものである。

1、日本人侵略者として知識人の良心が抑えられる

中国上海という場において、知名は自分の立場の複雑なことを意識したが、戦時下という状況では、知名は知識人としての良心とその立場の間で、どちらか一方の選択をしなければならないことを余儀なくされた。

中国民衆に、恨み、恐怖を感じさせたのは侵略者、植民者の一般的なイメージであるが、知名は良心のある知識人として、それとは異なる面を示している。

小説の中に、こんな場面がある。書院生が「你貴姓（お名前は何）」を繰り返して聞いている。向こうも「敝姓趙（趙と申します）」と繰り返して答えている。（一一八、一一九頁）「你貴姓」は中国語の中で改まった場合あるいは、尊敬する相手に対して使用する用語である。ただし、これは同文書院の日本人書院生が中国人の乞食に話した言葉である。い

かにも上品であるような会話に見えるが、後の文でわかるように、これは単なる書院生の中国語会話練習である。書院生は差し出した乞食の手を無視して、相変わず「你貴姓」を繰り返している。知名はその会話練習に加わらず、書院生の行為を不可解に思っている。その後、書院生はポケットから一元を取り出したが、考え直して、十分の一角に取り換えて、乞食に渡した。これに対して、知名は「そんなことをしたら、お前の人格を疑われるんだぞ」と冷やかした。（一一九頁）沖縄出身ゆえ、知名は日本人書院生の前ではいつも控え目であるが、この時ははっきりと反対意見を述べている。それに、この乞食については、「顔を白髪と白髭で包み、まるで仙人のような風情」に見え、書いた文章は「達筆」だけではない。文章がしっかりしていた」と思っている。中国人の乞食には他の書院生と違って、同情、さらに尊敬の意を示している。そして、軍米収買の場合にも中国農民への同情も見られる。

穴のなかに米俵が見えた。家長が体を乗り出した。知名は、おもわず銃剣をその胸の前に突き出した。家長がまた声をあげて泣いた。知名はそれを自分へ向けた呪いの声と感じたが、それでも銃剣を引つ込めることもできず、両手両腕が硬直したまま熱く震えるのを覚えた。（二〇頁）

知名は自分が持つ銃剣に突き出された中国人家長の泣き声が呪いの声に聞こえ、相手に同情して自分の行為を疑いつつも、突き出した銃剣を

引きもどすことはできなかつた。つまり、日本人という立場に制限され、自分の感情、知識人の良心を抑えたわけである。

2、日本人・沖縄人として体験した残酷な戦争の現実

知名は常に同文書院の書院生として自己認識しているが、その同文書院がいわゆる日中連携を理想としているにもかかわらず、前述のように、植民地・上海にある日本人学校の不自然さはすでに意識している。さらに、同文書院のキャンパスに関する描写からは戦争の匂いも伝わってくる。

その建物たちに支えられるように、さらにプラタナスの並木に囲まれて、院子は美しい。もと中国の交通大学の校舎である。（中略）交通大学が重慶へ移ったあとを、書院が臨時校舎として使ってきた。（中略）ひとつだけ伝説のようにおぼろげな話題があるのは、その院子の隅の異常に繁った草むらだ。そこに屍体が埋められている、と誰かが言った。このキャンパスで支那事変に虐殺がおこなわれたのかどうか、それは伝わっていない。その草むらを、その闇のなかの影の固まりが思い出させた。（三七頁）

このくだりの描写から得る情報はいくつかある。まず、現在、同文書院が臨時校舎として使っているキャンパスは、もともと中国の交通大学の校舎である。交通大学が重慶に移った。この交通大学の移転した事情

については、日本軍が侵略してきて、上海が陥落し、大学はやむを得ずまだ陥落していない重慶へ移ったという、日中戦争の背景が語られている。さらに、そのキャンパスの隅の草むらに死体が埋められているという伝説は、日本軍が行った虐殺のことを匂わせている。プラタナスの並木に囲まれた美しい書院のキャンパスは、表は平和のように見えるが、その裏に、日本軍が中国で行った残酷な侵略の痕跡が隠されているように表現されている。書院の欺瞞性が見事に暴かれている。

同文書院の欺瞞性は、書院の鈴江教授に関する内容からも表現されている。

（織田徴兵検査延期について）鶴のように痩せた鈴江教授は、ふたりの軍人に気を兼ねる風に、できるだけおだやかな調子で、知名に話しかけた。その口髭が威厳よりもむしろ滑稽に見えたほどである。壁にかけた寒山拾得図が笑っている。（五七頁）

鈴木教授が口をはさんだ。「同文書院というこの学校は、日本人として支那と協和提携することを理念としています。国は戦争をしていますが、われわれは平和のなかにいると考えているんです……」「反戦思想か」憲兵の声がいきなり大きくなった。「そうではありません。理想を言っているのです。戦争も平和のために」（六一二頁）

書院の鈴江教授が日本軍人に気兼ねする様子は、滑稽に見えた。この滑稽に見える鈴江教授に書院の理想を語らせるのも一種のアイロニーとし

か思えない。鈴江教授が語った書院の、いわゆる日中連携の理想も日本の威嚇の下ではナンセンスになってしまった。

同文書院は大都会上海という地であって、戦争の影はまだ薄い、いったん地方に行けば、確実に戦争という現実がある。

「着け剣！」伍長が号令をかけ、自分から進んで銃に着剣した。

一等兵と学生たちがあわてて従った。一瞬の金属音の乱れがあたりを威圧し、百姓たちがとたんに強張らせて、一三歩退った。(中略)

思いついたように藁束の山に近づくと、銃剣を構えて突き刺した。引き抜いたとき、米粒がバラバラと落ちてきた。(十六―十九頁)

納屋のなかから、老婆がころげるように出てきて、一等兵に縋った。纏足をしていた。泣き声で喚いているので、いよいよ言葉は聞き取れないが、抗議や訴えのこころは十分に察しがついた。(十八頁)

これは知名が書院生の立場にもかかわらず、兵隊に偽装させられ、軍米収買に参加した時の体験である。右の引用文で分かるように、日本軍が軍米収買の名目で、実は武力で中国の一般民衆から米を奪っている。こうした戦争の現実、知名の書院生としての中国を保護するという幻想を容赦なく崩した。つまり、侵略戦争という現実につかつたと言えよう。こうした現実を直視して、知名は「自分は何も分らない。分らないままに、今こうして学問のそとで現場のまっただなかに放り出されて

いる。しかも武器を帯びて。この武器は誰を殺すためのものか」(二八頁)と自分が信じてきた書院の理想、戦争の正当性を完全に疑うようになった。

以上が、日本人として体験した戦争の残酷な現実及びそれへの反省だといえるなら、以下のくだりは、沖繩人としての戦争体験だといえよう。

十一月の中旬に、知名は父から一通の葉書を受けとった。県庁に つとめる父のいつもの細く丹念な書体は懐かしかったが。郵便は二十日以上もかかっており、中身を読んで知名はしばらく呆然となった。十月十日に那覇市に米軍機の大空襲があつて全市が焼尽し、わが家も借家ながら焼け失せたので、八里離れた郷里に避難し、葉書はそこから出したという。もともと父と母とだけで、二人とも無事なのはよいが、隣の新垣家の人たちが避難中に直撃弾をくらって、一家全滅したのは痛ましい、とある。

(幸子!……)

胸のなかで名を呼ぶだけで、想像の延びようがなかった。葉書にはとくに幸子の名はない。父や母が幸子と知名とのことを、単に勉強を教え、教えられている以上の仲だと知っているかどうかは分からないが、今はすべてを父へ報告したい衝動に駆られる。ある種の懺悔の気持ちに、それは似ていた。(一九一頁)

ここでの戦争体験は父の一通の葉書を通して簡略に記録されている。

両親は無事であるが、恋人の幸子一家が全員なくなつた。これは沖繩にいたる父が体験したものである。知名は日本人として中国侵略戦争を体験し、加害者側であるが、父は故郷の沖繩で、太平洋戦争を体験し、被害者側にいる。知名は恋人幸子の死について、父の手紙には、「痛ましい」と書かれ、自分は胸の中に名前を呼ぶだけに止まり、「想像の延びようがなかった」とそれ以上の悲痛な気持ちを表していない。逆に、懺悔のような気持ちを詳しく説明している。それは幸子との関係を事前に父に打ち明けなかったことから発したように書かれているが、懺悔、すなわち反省という意味合いの気持ちだが、悲痛よりも色濃く表れているところに、作者のある種の思いが込められていると思わざるを得ない。

この父からの葉書に記されている沖繩での戦争体験は、実際に起きた沖繩戦を背景にしている。『デジタル版世界大百科事典』（平凡社）第二版の解説によると、沖繩戦は太平洋戦争の最終段階に、南西諸島、沖繩本島、周辺の島々で行われた日米最終の戦闘で、日本国内唯一の地上戦であった。一九四四年十月十日の空襲は、那覇市を中心に島の人口密集地を焼き払い、死者五百四十八人を出したが、以降沖繩は地上戦に突入する。また、『デジタル大辞泉』（小学館）の解説では、沖繩戦で、集団自決強制、日本軍による住民虐殺なども起こり、県民約十万人が犠牲になった。この作品を書き下ろした時期と前後して書かれた戯曲「神島」において、大城は真正面から、「沖繩戦で現実には起きた〈集団自決〉事件を取り上げ、その体験をくぐり抜けた島の人々の思想と生き方を通して、日常性のうちにひそむ過去の忘却と忘却を意識的に試みようとする

る現実を鋭く告発している」⁷。この作品における沖繩戦に触れる部分は父の体験談という形を取っており、間接的な描写に終わったが、沖繩人として知名の被害意識は表に出されている。「神島」で表した戦争に参加する人はその罪を償わなければならないという贖罪意識までには至っていないが、知名の加害者であると同時に、被害者でもあるその立場は、彼の戦争への懐疑意識をさらに促したと言えよう。

3、范淑英との屈折した交流体験

中国人范淑英とは友人の織田を通して知り合った。最初から范淑英の無邪気さに好感を持った。范淑英も知名に友好の意を示している。彼女の父范徳全は知名が沖繩出身のため彼に親近感を持っている。当時の日本と中国は侵略と被侵略の関係で、中国人が日本人に対しては、恐怖と恨みを持つのが一般的であったが、范淑英一家が知名に持っている感情は、やはり彼の沖繩出身、つまり昔の琉球と中国の特殊な関係による部分が大きい。

知名と范淑英の関係はただの友人とはいえない。少なくとも、「いつも見なれた看護服の白衣でなく、淡いグリーン色の無地の中国服をノー・スリーブで着ているのも、知名にはまぶしい思いがした」⁸。范淑英が、反日本活動に参加したことで、日本軍に連行された兄范景光を救うために、知名に頼みに来た場面で、次の会話がある。

「でも、日本人はいいわ。生活が安定しているから」

「生活が安定？」

「配給があるでしょう。安い配給が」

(中略)

しかし、「配給があるでしょう」という言いかたは、(中略)上海の中国人たちのあいだで日本人を語るとき合言葉のようなものになっているのかも知れない。そう思うと、こんどは范淑英がいきなり自分たち日本人からはるかに遠くへ飛び離れた存在に見えてきた。

(中略) 新垣幸子は幸せだ。という思いが湧いた。(中略) 日本人同士で愛し合う仲であること、それだけで幸せである、と思った。

(一四四—一四五頁)

知名は范淑英に親近感を持っており、彼女を見ると、自分の日本人の恋人を思い出すほどの好感を持っている。にもかかわらず、范淑英との間には、ある隔たりが始終存在している。しかも、知名はそれに気づいている。「この日本人である自分は、中国人である娘を前にして、はたして何者であるのか」(一四五—一四六頁)と、その隔たりは日本人という中国の敵である立場によるものだと意識している。しかし、敗戦後、感傷的な思いを誰かに訴えようと思つたとき、范淑英のことが最初に頭に浮かんできた。

知名は黙って頭をかいた。理想高邁も敗戦で地に墜ちた感じだが、

——と考えると、感傷的な連想がとめどもなく湧いて、そのことを話しあう相手がほしくなり、ふつと思いだして、范淑英に会いたくなつた。(二四七頁)

知名は同文書院の欺瞞性に気づきながらも、若い一学生としてかつて持っていた高邁な理想が敗戦をきっかけに破れてしまったように感じた。わが青春時代が痛々しい思い出で終わったようにも感じた。その複雑な思いを、同じ同文書院の学生と話し合うのがよりよく話題が通じるはずであろうが、そうではなく、中国人の范淑英に話したいと思うのは何を意味するだろう。范淑英への親近感はどこから由来したのか、知名自身も「いま同時に范淑英に思いを寄せているということか、とも考えてみたが、そうとも言えないような気がした」(一四五頁)と、美しい少女に思いを寄せる若い青年という関係を否定した。作品にはそれ以上のことは書かれていないが、思いを訴えたい対象としていくつからかは、やはり心を通わせる間柄だといえよう。

では、どうしてお互いに理解できる関係になれたのだろうか。戦時下において、上海は植民地になり、沖縄も朝鮮、台湾と同じく日本の植民地だったと言える。范淑英と同じく植民地出身という立場の相似性が大きく働いていると考えられる。しかし戦時下という状況で、彼のもう一つの身分、表向きの植民者としての日本人の立場では、お互いの関係に隔たりを作ってしまう。敗戦をきっかけに、お互いに、支配被支配の関

係から脱して、そういう隔たりも消え、いままでわざと避けていた親近関係が戻ってきて、范淑英に会いたくなったのであろう。こういうわけで、複雑な多重的立場のため、知名と、中国人范淑英との交流は、紆余屈折を経ざるを得なかったのである。

終わりに

ここで、岡本氏の本作品への批判を顧みよう。氏は、この作品において、沖繩へのこだわりがないと批判した。たしかに、沖繩は、主人公知名にとつて、避けたい話題である。しかし、その原因を作中人物金井にはつきりと語らせた。それは平等を求めたためである。ここから日本人になりたいという意識の裏側には、沖繩が日本の植民地としてうけた差別問題が浮かび上がった。さらに、知名の潜在意識に潜んでいる、かつて沖繩人として受けた被差別の歴史的記憶も、彼の言語に関する異常な罪意識からうかがえる。つまり沖繩は避けたくても、すでにこころの深部に刻み込まれている存在である。

また、作品において主人公知名の周辺に、日本の植民地出身者が何人か配置されることによつて、知名の沖繩に対する意識を自覚させた。とくに、朝鮮出身者である金井の影響で、知名は沖繩出身である自分を考えるように成長した。また、中国人范景光が敗戦後、知名の反省をうけて、「君や金井が人間の真実を貫いて生きるように期待することだった」(三二〇頁)「同文書院は敵だが……」、「しかし、君や金井が将来同志になるよう期待している」(三二二頁)と、知名と金井を同文書院の

一般書院生とは区別して、好意的に見ている。これも彼らが植民地出身者であるからだろう。

日本の敗戦後、知名が金井の行方に大変こだわりの興味深いことである。金井は普段から朝鮮独立論者であり、敗戦をきっかけに姿を消した。彼は朝鮮に帰ったが、共産党の解放区延安に行ったのかどうか、誰も知らない。知名は他の書院生より、ずっと金井の行方が気になっていゝ。同じ植民地出身者の行方を追う知名の思ひははつきり語られないが、植民地沖繩の将来を案じる沖繩青年としての知名だからであろう。

以上のように、沖繩は避けられながらも、随所に影のようについている。これは知名の多重の立場によるものである。戦時下、侵略者植民者として中国の地に踏み込んだ以上、表面的には日本人の立場とするほかなかった。敗戦後、知名の戦争への反省の意は同文書院書院生として、つまり日本人として、表しているのである。大城は作品の「初版あとがき」で、作品に表されている彼の反省を含む複雑な感情は日本のそれと重なることに、作品の読まれる価値があると述べている(三三三頁)。つまり、戦争への反省はただ沖繩人としてではなく、日本人としてすべきことであると強調している。ゆえに、沖繩人としての被害意識は、戦争に対する反省の意を妨げないように、ある程度抑えられている。しかし、そのかわりに、沖繩人としての加害者意識も薄らいでしまう。たしかに、大城の他の作品に比べて、この作品では、沖繩の色彩はそれほど濃厚ではないが、沖繩と切り離れた大城文学の可能性はやはり低いだらう。敗戦直後の作品⁸に現れた強烈な日本人意識に比べれば、三十

何年過ぎてから当時の体験を題材にしたこの作品の場合は、明らかに日本人意識が弱め、代わって、沖繩人意識が加わった。つまり、この作品において、大城が日本人としての痛々しい青春体験を語ろうとしても、沖繩は避けられないもの、内在化されているものとして表象されているのである。

一 里原昭『琉球弧の文学 大城立裕の世界』 法政大学出版社 一九九一年十二月初版第一刷 viii頁

二 この作品のメインタイトルの下に、小説東亜同文書院というサブタイトルが付されている。先行研究論文においてのタイトルの書き方を参考にして、サブタイトルを省略することにした。また、テキストとして用いたのは一九八八年六月中央公論社出版のものである。

三 岡本恵徳「文学状況の現在——大城立裕『朝、上海に立ちつくす』をめぐって」『新沖繩文学』第五九号

四 武山梅乗「もう一つの戦争——『朝、上海に立ちつくす』小説東亜同文書院——」『不穏でユーモラスなアイコンたち——大城立裕の文学と〈沖繩〉』 晶文社 二〇一三年三月

五 劉永輝「論日本沖繩方言と〈沖繩日本語〉の形成」『中南林業科技大学学報』（社科版）二〇〇九年六月号 一一八〜一一九頁

六 小説の中に、日本人の会話の中で〈支那〉という用語が何度も出ている。

これは侮辱的な意味合いがある言葉である故、会話以外の地の文の場合（中国）という用語を使っている。本論の引用が会話である場合は、学術規範に従って、原文のままにしている。

七 岡本恵徳『沖繩文学の地平 三 戯曲「神島」の問題』 三一書房 一九八一年十月 一〇四頁

八 たとえば、敗戦直後に書かれた詩「茫々——復員者の歌へる」には、「しかし私は尚も信じよう／この向ふには日本がある／ニッポンが——／混沌たる夢をかなぐりすてた／現実の母国が私を待つてゐる」という詩句があり、強烈な日本人意識が表れている。

※ 本論文は中国の国家社会科学基金项目（12B61025）「琉球群島地位問題総合研究」の中間成果の一つである。